下関市豊北町域の弥生時代遺跡

小 林 善 也

１．はじめに

下関市豊北町域[1)]では、旧豊北町時代の平成 13 年度から国営農地再編整備事業（圃場整備事業）の実質的な工事施工が始まった。その総事業面積は 515ha にも及び、町域圃場の大半を対象とした一大事業である。この事業に伴う埋蔵文化財の本発掘調査実施件数は平成 17 年度までで 45 件、その総調査面積はおよそ 75,000 ㎡という膨大な面積にのぼる。近年の全国的な埋蔵文化財調査件数の減少傾向とは相反する状況である。この発掘調査によって、当地域は膨大な考古資料の増加に見舞われることとなった。その津波のように押し寄せた資料をいかに整理し、地域史を語り継いでいくための生きた資料としていかに活用していくのかが、今後の最も問われるべき課題である。その答えの一つとして、まずは現状での豊北町域の遺跡を通観し、各時代ごとの様相を大局的に整理しておくことは必要と思われる。そしてこれによって、地域史を紐解いていくための具体的な検討課題が与えられると考えている。今回は、その足がかりとして弥生時代の遺跡を取り上げることにしたい。

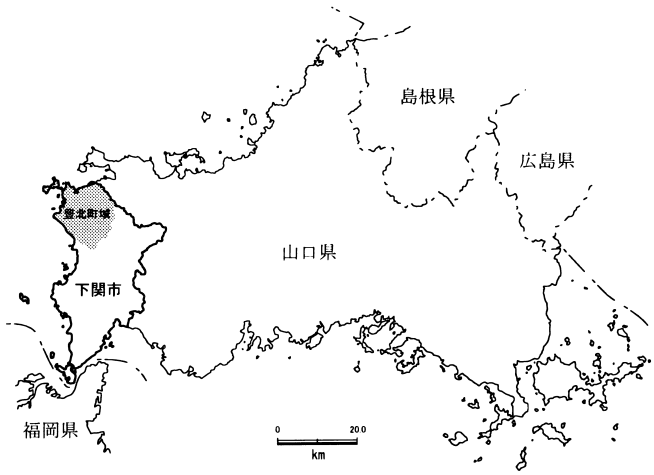

図１　下関市豊北町域位置図

豊北町域は、弥生時代を代表する遺跡として全国的にも著名な、史跡土井ヶ浜遺跡を有する地域である。土井ヶ浜遺跡はその優れた資料価値から、これまでにも分野を問わず多くの研究者の研究対象とされ、弥生人の起源、墓制、精神構造、集団構造、物資流通のネットワークなど、様々な視点から数多くの成果を世に送り出してきた。しかしその反面、同時代のその他の遺跡については僅か２、３の遺跡が知られるのみで、当地域の弥生時代は「土井ヶ浜遺跡」に特化された極めて断片的な情報でもって語られてきたに過ぎなかった。そして、そのことが土井ヶ浜遺跡研究の深化を拒む大きな要因にもなっていた。つまり、土井ヶ浜遺跡から豊北町域、さらには響灘沿岸地域の弥生社会の総合的な解明をめざすためには、土井ヶ浜弥生人の集落を確認し、そこから得られる各種考古資料との対比なくしては、さらなる研究の深化を図ることに限界が生じるためである。古くからの重要課題として土井ヶ浜弥生人の集落の究明が求められてきたのはそのためであった。

このような視点にたてば、今この段階で当地域の弥生時代遺跡の基礎的な動向を整理しておくことは、今後の土井ヶ浜遺跡研究の深化を促すためにも、さらには響灘沿岸地域の弥生社会を考えるうえでも非常に有益なことであろう。もちろん、未だ当地域の弥生時代の具体像を描くほどの資料蓄積には至っていないが、それでもかつての情報量に比べれば格段の差である。今回の作業は、そのささや

かな一歩である。

2．研究小史

豊北町域が位置する響灘沿岸地域[2)]はその地理的位置からもわかるように、古くから北部九州地域、山陰地域、山陽地域を繋ぐ地域間交渉の要として位置付けられてきた地域であり、下関市のなかでも多くの弥生時代遺跡が所在する地域である。金関丈夫氏が「渡来・混血説」を提唱する根幹となった土井ヶ浜遺跡、著しい数の貯蔵用竪穴群が確認され弥生時代前期集落の一端を具体的に示し、また遺跡保存問題の原点ともなった綾羅木郷遺跡など、山口県における弥生時代研究の重点地域として、これまでにも人類学、考古学、民俗学といった各分野から数々の問題が提起されてきた地域でもある。ここでは、これまでの数多くの研究のなかでも、後述する豊北町域の弥生時代遺跡の動向を理解するうえで特に指標的な研究についてみておきたい。

響灘沿岸地域における弥生時代遺跡について最初に総括的な作業をおこなったのは国分直一氏である。国分氏は当時の遺跡の分布と、そこから出土した遺構や遺物の様相を通して、半農半漁をイメージした生業や墓制、あるいはそこから垣間見える社会構造などについて触れ、当地域の弥生時代前期の地域性について概観した。なかでも特に重要なことは、当地域の遺跡分布を俯瞰し、前期は沿岸部に主体的に分布するのに対し、中期以降はその主体を内陸部に移すという遺跡立地の変化に注目されたことである。そして、その要因については戦争のような政治的情勢や海進による塩害という自然環境の変化といった事情を考慮し、前期とそれ以降の遺跡立地の変遷要因を明らかにしていくことを最も重要な課題として位置付けたのである（国分 1970）。

国分氏が要因の一つとして考慮された海進現象については、小野忠熙氏によって具体的に検討が進められていた。高地性集落の研究を主要なライフワークとされていた小野氏は、早くから弥生時代の小海進と高地性集落の垂直的遷移現象になんらかの相関があるのではないかという視点から、弥生時代の海進現象の存否に注意を払っていた[3)]。そして、おもに響灘～瀬戸内沿岸をフィールドとして、砂浜海岸に発達する砂州や砂丘の形成過程と弥生時代遺跡の分布状況、あるいは暖海棲ハイガイや鹹水産マガキといった遺存体の出土傾向から、弥生時代中期から後期初頭の間をピークとして、響灘沿岸部においても弥生小海進が起きた可能性を指摘し（小野 1975b）、弥生時代中期における沖積低地の集落立地については弥生小海進が影響を与えた（小野 1975a）としたのである[4)]。この小野氏の指摘は現在の響灘沿岸の弥生時代前期から中期にかけての遺跡立地の変化要因を推し量るうえで潜在的に影響を与えているようで、現在も小海進を考慮した自然環境の変化に起因した現象ではないかとするむきがあるように思える。

弥生時代中期から後期にかけて小海進の傾向がみられることは古くから知られ、その発現期や変動量に地域差があることも中野尊正氏（中野 1956）や井関弘太郎氏（井関 1968・1974）などによって指摘されていた（小野 1975b）。そのため、先の潜在意識を考慮する限り、響灘沿岸地域における弥生小海進期の海水準変動やその年代が実際どのようなものであったのか、以降の研究の進展に照らして再検証する必要があろう。そのためにはやはり、現在の自然科学の分野の力を借りた学際的な検証が不可欠であろう。

また長年、響灘沿岸の弥生時代遺跡の発掘調査に精力的に携わってこられた金関恕氏は、これまでの自身の研究の総括的作業として、土井ヶ浜遺跡の１次から５次の発掘調査成果をもとに、人口問題を主とした北浦の弥生前期社会について考察した。金関氏はまず、北浦沿岸部に点在する小海岸平野の面積とそこに占地する弥生時代遺跡の時期的様相から、川棚、あるいは川中のような規模の大きな海岸平野に弥生時代の最初のコロニーがつくられ、人口の増加と共に、より小規模な海岸平野が二次的なコロニーとして開かれたという段階的拡散現象を推定した。これを念頭に、金関氏は土井ヶ浜遺跡の弥生人骨の出土状況から仮の総被葬者数を 986 体内外とし、出土した土器型式から、遺跡の存続期間を最短 50 年程度とした。そこから、土井ヶ浜集団の年間死亡者数を 20 人内外、年間粗死亡率を 1000 人あたり 50 人内外とすることで、土井ヶ浜遺跡 50 年間の造墓集団の平均人口をまず 394 人と積算した。そしてこの仮に得られた数値を、被葬者における男女比率、形質人類学的な性別判定の誤差率、墓地の使用期間、死亡率、周辺地区における男女例数の差の当否、出土地点不明人骨の帰属などの６項目に照らし、先の平均人口 394 人の積算根拠となる仮定の妥当性を検証することで土井ヶ浜集団の平均人口を補正し、最終的に 150 人内外とするのが最も現実的な数値であるとしたのである。さらに、この人口を基準とし北浦の各海岸平野の規模に対比させることで、当地域の弥生時代前期末頃の人口を、最大１万３千人から最小 250 人内外とし、4000 人内外が最もありそうな数とされたのである[5)]。そして、この数値と綾羅木郷遺跡で認められる貯蔵用竪穴が前期の古段階から新段階に向かって急増する現象を相関させることで、前期末に向かって人口が増加した証左とし、その増大が一つの原因となって、北浦弥生前期社会が何かのカタストロフを迎えたと想定した（金関 1980）。

このように、金関氏は当地域の弥生時代の人口問題を正面から取り上げることで、そこから北浦弥生前期社会の盛衰の要因に迫ろうとしたのであり、そこには将来、弥生社会の人間動態を明らかにすることを強く意識していたことを感じさせられるものである。しかしながら、その後県内において人口問題を積極的に論じようとする試みが引き継がれることはなかった。もちろんこれは、金関氏も述べているように、集団の人口は仮定の条件の変化次第で大きく動く（金関 1980）ことになるため、実証的な部分が少ないきらいがあるという意識によるものなのかも知れない。しかしそうであったとしても、人口問題は時代を問わず当時の人間動態に迫るうえで重要な視点をもたらすことには違いなく、この視点は継承されるべきであろう。

以降、響灘沿岸地域の弥生時代については個別遺跡、遺物の検討はあっても、当該地域の弥生社会総体について積極的に論じた作業は停滞することとなったが、最近になって、個別遺物の検討からその社会動態に一歩踏み込んだものとして、田畑直彦氏の作業がある。

田畑氏は長門北浦地域の弥生文化成立期の土器様相を検討するなかで、沖田遺跡や土井ヶ浜遺跡出土の初期遠賀川式土器の様相が、福岡県宗像郡津屋崎町今川遺跡Ｖ字溝や大井三倉遺跡２号溝出土土器に代表される宗像地域の土器に近似することや、板付Ⅱａ式との共通点がみられることから、板付Ⅰｂ～Ⅱａ式段階において宗像地域を中心とした北部九州から少人数の人の移動があったことを想定した。そして、土井ヶ浜弥生人のルーツについても同様の地域からやってきた人々であると推測したのである。さらに、自身のこれまでの作業（田畑 2003a）や鯨骨製アワビオコシ及び結合式釣針の分布状況、埋葬施設や列状配置墓域（山田 2000）にみられる共通性などから、長門北浦地域から山陰

地域への漁民を中心とした少人数の人の移動まで言及した。また、先述の金関氏が想定した一次的コロニーから二次的コロニーへという拡散については、当初から、島嶼部をはじめ、各平野単位で小規模な移住がおこなわれ、在地の縄文人ともに集落を形成し、板付Ⅱａ－１式になると、綾羅木郷遺跡、吉永遺跡といった拠点集落が成立するとした。そして、前期後半になると規模は拡大し、そこから分村していく形で遺跡数が倍増し、山陰地方への移住もうかがえる。社会的緊張を反映し、堂ノ尾山遺跡でみられるように高地性集落も出現するという社会動態を示した。そしてこの段階をもって、綾羅木式土器に象徴される独自性をもった弥生社会が成立し、土器や土笛、石鎌などにみられるように山陰地域と密接な関係をもつ文化圏を形成したと指摘したのである（田畑 2003b)。このような田畑氏の指摘は、詳細な土器の検討によって響灘沿岸地域の弥生前期社会の動態にまで迫り得ることを具体的に示した点で高く評価される。今後の北浦弥生社会の解明に向けての指針となる重要な作業といえよう。

以上、雑駁ではあるが、後述する遺跡の動向を考えるうえで特に指標となる研究についてみてきた。このような先学の研究をふまえながら、豊北町域の弥生時代遺跡について概観していきたい。

３．豊北町域の弥生時代遺跡

１）地理的環境

各遺跡の概要について述べる前に、まずは豊北町域の地理的環境について簡単にまとめておく。

下関市豊北町域は本州島の西北端、市域最北に位置し、響灘及び日本海に面する沿岸部から山間部までの標高１ｍ～ 130 ｍを主とする中山間地帯である。町域は東西約 18 ㎞、南北約 20 ㎞、面積は 168.63 ㎡である。町域界は、東はザレ山（標高 390 ｍ)、町域最高峰の白滝山（標高 668 ｍ)、城山（標高 376 ｍ）の連山を境として長門市（旧・油谷町）並びに豊田町域と接し、南は霊峰狗留孫山を中心とする山々を介して豊田町域及び豊浦町域に接している。北は日本海、西は響灘に面し、町域北部から西部にかけては約 35 ㎞の湾曲に富む沈降海岸を形成している。北西には、最短で約 1.5 ㎞の海士ヶ瀬戸を隔て角島があり、島は日本海と響灘の境界に位置する。内陸部は前述の山々から派生した幾筋もの低丘陵が無数に走る起伏に富んだ地形である。そして、これらの丘陵は沿岸部にまで達し、大小の岬を形成する状況を普遍的に見ることができる。また、丘陵の谷間には多くの大小河川が走り、それらのまとまりから粟野川水系粟野川、沖田川水系沖田川、荒田川水系荒田川、矢玉川水系矢玉川及びその支流、その他小河川流域の５つの水系単位に区分できる。

このように、豊北町域は山地や丘陵の占める割合が非常に高いため低地がほとんど見られず、形成される低地も丘陵の合間をぬうように走る小河川の浸食作用を主として形成された狭長な谷底平野や狭小な盆地に限られている。そのため、現代の概耕地についても大半が河川周辺部に沿った狭長な低地と、海岸部に開けた狭小な低地に分散形成されている状況である。このような地理的な特性をふまえ、以下に豊北町域の弥生時代遺跡を概観していくこととする。

２）遺跡各説

ここで取り上げる遺跡は発掘調査及び報告書が刊行され、その時期や性格などがある程度把握できる遺跡に留めている。そのため、現在報告書作成中の遺跡や、いわゆる散布地としてその存在が予測

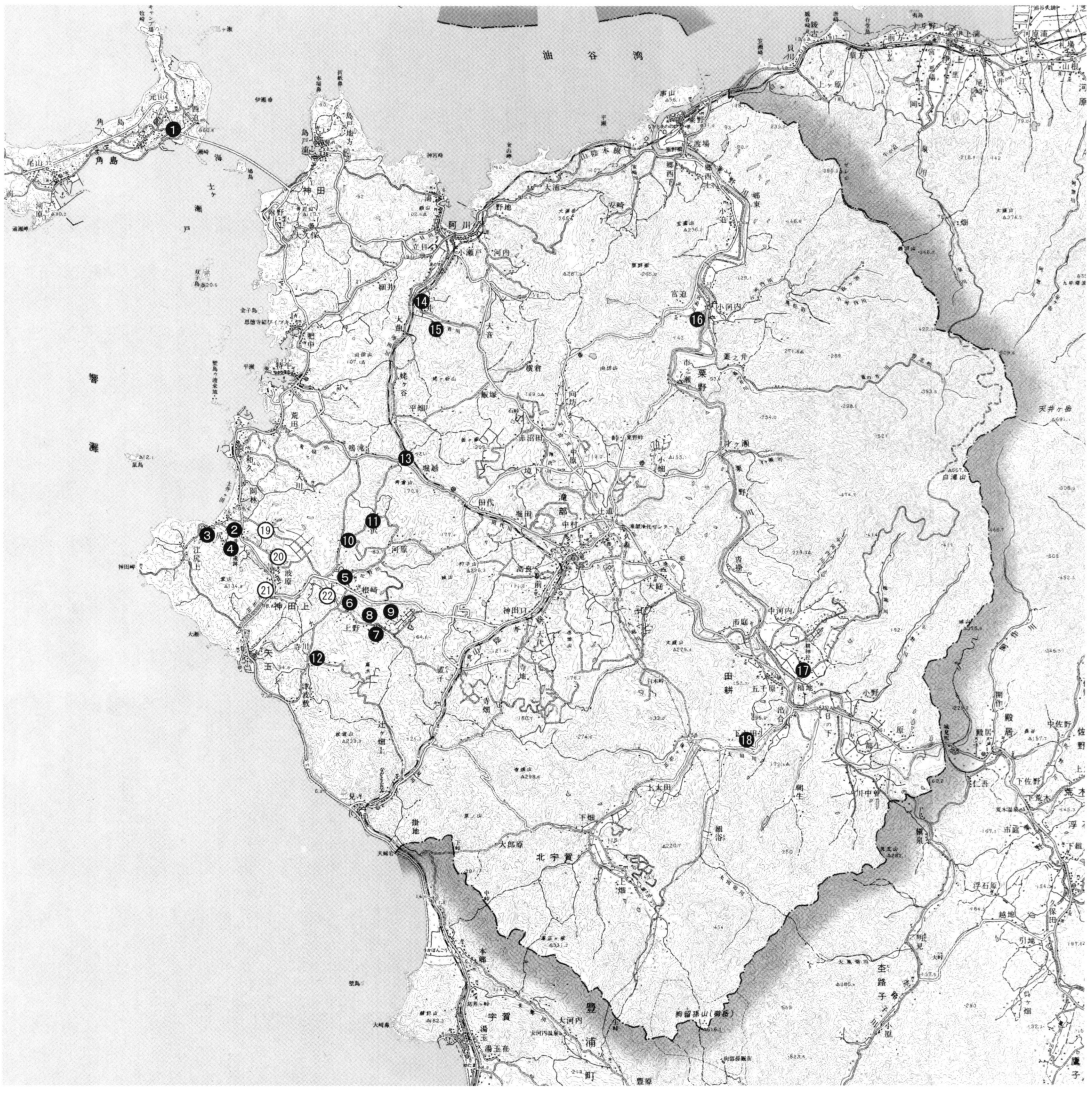

図２ 豊北町域における弥生時代遺跡分布状況（Ｓ＝1/150,000）

される遺跡は含まれていないが、今回の論旨に特に影響を及ぼすものではない[6)]。また、説明にあたっては、便宜的に○○地区という地域区分を用いるが、これは『豊北町史二』第６章における区分（豊北町 1994）を踏襲したものである。なお神玉地区については、３章の予察で詳述する関係上、表１にさらに細分した地区名称を示した。では以下に、豊北町域の弥生時代遺跡 18 遺跡の概要を述べる。

【角島地区】

①沖田遺跡（古庄編 2000、中村 2003） 豊北町大字角島字沖田の丘陵斜面に位置する。標高約 4.5 ～９ｍである。縄文時代晩期末～弥生時代前期末を主体とする土器、石器が多量に出土している。中期初頭の土器もごく僅かであるが出土している。これらの遺物が出土した包含層は、流れ込みによる堆積層と理解されている。注目されるのは、やはり突帯文土器と初期遠賀川式土器が量的にまとまって出土したことであろう。これらの土器は綾羅木Ｉ式に先行する型式群と考えられている。また、県内初例となる大洞Ａ式古段階に比定される東日本系浅鉢も出土していることから、当該期に日本海を介して東日本系土器が移動していた可能性を示す資料として貴重である（田畑 2003b）。以降、土器型式上の多少の間断はあるものの、基本的には中期初頭まで集落が営まれていたと考えられる。また、前期後半に比定される湯免式壺も出土している。この土器は県域の日本海側にのみ少数分布する土器

で、現在の分布の西限となっている（田畑 2001）。

石器には、東日本の獣形勾玉を模造したとされる軽石製穿孔品や東日本の縄文時代終末と初期弥生時代にみられる型式と共通する平面撥形を呈する打製石斧や、磨製石剣、小型扁平片刃石斧、背幅が広い半月形石包丁といった大陸系磨製石斧もみられる。また、土笛も出土している。

沖田遺跡はその地理的な位置をとってみても、北部九州～山陰、さらには瀬戸内を結ぶ海上の基点として位置付けられ、そのことが出土遺物にも反映されている。弥生時代成立期の社会動態を明らかにするうえで、極めて重要な遺跡である。なお、遺跡主体部は背後の丘陵高位に位置すると考えられる。

【神玉地区】

②土井ヶ浜遺跡（乗安 2000・2002）　豊北町大字神田上字土井ヶ浜、沼田に所在する。遺跡は土井ヶ浜海岸に向かって東から西へ細長く延びる低丘陵の先に形成された砂丘上に位置する。弥生時代前期中頃～中期にかけての集団埋葬墓地である。標高約３～５ｍである。これまで 19 次にわたる発掘調査がおこなわれ、極めて保存状態の良い 300 体を越える弥生人骨が出土している。弥生人の生成に関する「渡来・混血説」が金関丈夫氏により提起されることとなった学史的にも著名な遺跡である。弥生人の形質や当時の埋葬習俗および墓制、社会構造などを考えるうえで、国内でも極めて重要な遺跡であることから、1962 年（昭和 37 年）に国史跡に指定された。

墓域の広がりは、少なくとも東西約 130 ｍ、南北約 70 ｍと推定されている。墓域は砂丘の高位を選定し一定の空間を置きながら東西に列状に配され、少なくとも東側と西側の二つ以上の墓群からなると推定されている。これらの群は、埋葬状況や副葬品などに異なった様相がみられることから造墓集団の違いが反映されているものと捉えられているが、埋葬人骨のほとんどが頭位を南東に向けた仰臥屈肢の姿勢をとるという、造墓集団の違いを越えた共通の観念形態を有していることは非常に注目される。

埋葬形式としては、土坑墓やその系譜で捉えることもできる石囲墓、配石墓、立石墓と箱式石棺墓など多様であるが、土坑墓が大半を占め石棺墓は極めて少ない。また、出土人骨の埋葬状況も単層埋葬を基本とするが、同一の墓への合葬や追葬といった複数体埋葬や再葬といった多様性が認められる。さらに、弥生人としては珍しく風習的抜歯の施行率が高いことも特徴的である。

埋葬に伴う副葬品や供献品は貝製装身具類（腕輪、指輪、小玉など）や碧玉製管玉、翡翠製勾玉、ガラス製トンボ玉、打製及び磨製石鏃、打製石斧、鉄器片などがあるが装身具類が大半を占める。土器は壺、甕、鉢、高坏などの器種がみられるが、壺が大半を占め甕はごく僅かである。ただ出土量としては総じて少なく、副葬品や供献品の状況からは薄葬傾向であることが指摘されている。

なお、当遺跡は前期及び中期の埋葬遺構の上層から弥生時代終末～古墳時代にかけての炉跡や土坑も確認されており、完存率の非常に高い土器群や小形仿製鏡、鉄製素環頭刀子、鉄鏃、鉄斧、鉄鑿、鉄鎌、鉄鍬先の出土などから、祭祀に関連する場として使用されていた可能性が考えられている。さらに、その上層は中・近世の埋葬遺構が確認されている。

③宮ノ下遺跡（小林編 2005）　豊北町大字神田上字宮ノ下の眼下に響灘を見下ろす低丘陵に位置する。標高約６～９ｍである。弥生時代終末～古墳時代前期、古墳時代後期、奈良時代～鎌倉時代を中心とした遺跡である。なかでも古代の遺構や遺物の密度が高く、とりわけ銅製帯金具、棹秤のおもり

と考えられる鐸形石製品（権）といった出土遺物から公的機能を有した遺跡であった可能性がある。弥生土器は調査区中央で確認された埋没谷 SD003 に堆積した包含層から前期後半～前期末の壺、甕などが少数出土し、中期から後期の土器は確認されなかった。しかし、弥生時代終末～古墳時代初頭の土器の出土は非常に多く、いわゆる土井ヶ浜Ⅳ式に近接する時期の土器が出土している。様相としては、庄内式や布留式といった畿内系土器や山陰系土器の出土が顕著で、在地系土器にもその影響を看取できるという特色がある。響灘沿岸地域では近年、当該期の指標となりうる土器が出土し資料が蓄積されてきているが、いずれも南部域に位置する遺跡であった。そのため、その北部域に位置する宮ノ下遺跡から当該期の土器がまとまって出土したことは、今後、響灘沿岸地域における外来系土器の流入と展開、これらと在地土器の関わりを考えるうえで貴重な資料となるであろう。また、このような土器様相からは、東に約 500 mに位置する土井ヶ浜遺跡のありかたやそれとの関係を考えるうえでも見逃せない事象である[7]。なお、これら遺物の時期に対応する住居などの遺構は確認されていないが、複数確認された竪穴住居のなかに当該期の遺構が含まれている可能性は捨てきれない[8]。

④土井ヶ浜南遺跡（鈴木編 1992・1993、有福編 2005）　豊北町大字神田上字寺ヶ浴、広田に所在し、標高約 135 mの堂山を起点とする南から北に延びる低丘陵に位置する[9]。標高約４～14 mである。遺跡の北 250 m先には土井ヶ浜遺跡がある。

土井ヶ浜南遺跡の発掘調査は、土井ヶ浜遺跡の被葬者たちの集落を把握する目的で、1991 年（平成３年）に山口県教育委員会によりおこなわれた重要遺跡確認緊急調査を契機とする。その後、各種土木工事や学術調査に起因する発掘調査により計５次の調査がおこなわれ、総発掘面積は 8,000 ㎡にのぼる。

これまでの調査成果からは、縄文時代前期および晩期、弥生時代前期および後期後半～終末、古墳時代前期および後期、奈良時代～鎌倉時代の遺構、遺物が確認されており、この丘陵が長期にわたり断続的に居住域として利用されてきたことがわかる。その後、遅くとも近世以降には耕作地として使用され現在に至っている。そのため、いずれの時代も遺構の残存状況は悪く、弥生時代の遺構については特に不良である。

弥生時代前期に対応する遺構はいずれも前期後半～末に比定されるもので、土坑、貯蔵用竪穴[10]、溝状遺構、柱穴などがあり、検出数は土坑が大半を占める。いうまでもなく、これらの遺構は集落を構成する主要属性であるため、１次調査からの指摘どおり土井ヶ浜南遺跡が土井ヶ浜遺跡の被葬者たちの集落の一つであったことはまず間違いないところであろう。しかし、やはり真に居住域として確定付ける住居跡が確認されていないことは留意される[11]。

前期の遺構の時期が前期後半～末頃を主体とすることに対して、出土土器は突帯文期～前期末にかけてのものが出土している。そのため、少なくとも弥生時代における当遺跡の集落形成時期は縄文時代晩期末ないし弥生時代初頭の時期まで遡ることは十分考慮され、以降、前期を通して継続的な集落を形成していた可能性が高い。したがって、土井ヶ浜遺跡の造墓活動の開始期及びその後の変遷を考えるうえで示唆的な遺跡といえよう。ところが、中期に入ると突如として人間活動の痕跡が途絶え、再び集落として機能するのは終末期前後になってからである。

この時期の遺構には竪穴住居、土坑、溝状遺構、柱穴などがある。各地点での濃淡はあるものの調

査区のほぼ全域に広がっており、遺構、遺物の密度からも遺跡の規模は大きくなっていることがわかる。[12] このなかで、注目される各遺構や遺物について触れておく。平成15年度に寺ヶ浴遺跡として調査されたSI0001やSI0003の方形竪穴住居から出土した土器のなかには、宮ノ下遺跡同様いわゆる土井ヶ浜Ⅳ式に近接する時期の土器が出土している。[13] このことは、宮ノ下遺跡同様、当該期の土井ヶ浜遺跡のありかたとその関係を考えるうえで看過できない事象である。また、SI0001は円形周溝を備えていることも特徴的である。このような形態をなす終末期の住居は豊北町域では甲殿遺跡で確認されているほか、豊浦町域の吉永遺跡、菊川町域の下七見遺跡などに知られている程度であり、県内でも類例は多くない。[14] 現状の分布からは響灘沿岸地域に偏在しており、海を接点とした文化事象の一片を物語る住居形態であるのかもしれない。いずれにせよ、このような住居の性格や集落内での位置付けについては、今後注意する必要があろう。

⑤竜王遺跡（小林編2004）　豊北町大字神田上字竜王の低丘陵裾に所在する。標高約25～27ｍである。弥生時代から平安時代にかけての遺物が包含層から土器類を中心に出土している。これらのなかで、量的にまとまるのは弥生時代前期後半～終末期の土器で、なかでも前期末～中期後半のものが目立つ。土器相からは、弥生時代を通じて断続的に集落が営まれていたと考えられる。集落主体部は背後に控える台地上に位置するのであろう。竜王遺跡は豊北町域では数少ない中期の土器を出土する遺跡であり、現在のところ、土井ヶ浜遺跡に直線距離で約２㎞と距離的に最も近い遺跡として非常に重要な遺跡である。

⑥南ヶ畑遺跡（小南ほか編2004）　豊北町大字神田上字南ヶ畑の低丘陵緩斜面に位置する。標高約46ｍである。弥生時代後期後半～終末期と中世後半の遺跡である。遺跡の中心は弥生時代後期後半～終末期である。竪穴住居４軒、土坑３基、溝状遺構３条が検出されたが、後世の著しい削平により、残存状態は不良である。土器はこれらの遺構に伴って、少数出土している。

⑦岡ノ台遺跡（近藤編2004）　豊北町大字神田上字岡ノ台の低丘陵裾部に位置し、前述の南ヶ畑遺跡とは小谷を挟んでほぼ正面の位置関係にある。標高約43.5～50ｍである。包含層を主体とする遺跡で、弥生時代後期後半～中世の土器が出土している。量的にまとまるのは弥生時代後期後半から終末の土器である。集落主体部は背後に控える低丘陵頂部に位置するのであろう。

⑧上今宮遺跡（田部編2003）　豊北町大字神田上字上今宮の丘陵裾部に位置する。標高約25～31ｍである。古代～中世前半を中心とする遺跡で、特に古代は包含層から出土した多様な遺物から官衙的色彩の強い遺跡であることを窺わせる。弥生土器は包含層から、前期末の土器が僅かに確認されている。

⑨中平尾遺跡（田部編2003）　豊北町大字神田上字中平尾の台地上に位置する。標高約47～53ｍである。中世後半を中心とした遺跡で、多数の掘立柱建物や埋葬跡が確認されている。弥生時代の遺構・遺物としては弥生時代終末の竪穴住居２軒とこれらに伴う僅かな土器が出土しているが、後世の著しい削平により残存状態は不良である。

⑩西沢遺跡（毛利編2004）　豊北町大字神田上字西沢の低丘陵先端上に位置する。標高約28～29.5ｍである。弥生時代後期、古墳時代後期～終末を中心とする遺跡である。弥生時代の遺構、遺物としては、SX002から出土した前期末～中期初頭の壺・甕・蓋など、SK006から意図的に埋納した

ような状況で出土した後期前半～中頃の壺（口縁部）と鉢（口縁～体部）、SD007から出土した後期前半～中頃の壺、甕などがある。また、調査区東で確認された埋没谷SX003に堆積した包含層から多量の土器が出土し、弥生時代後期と古墳時代後期～終末頃の二時期に大別できる。弥生時代後期の土器様相としては、北部九州の高三潴式～下大隈式に相当する複合口縁壺や頸部及び胴部に断面方形の突帯を巡らす大型壺が目立って出土しており、SK006やSD007といった遺構の時期に対応する土器群とみられる。複合口縁壺に代表される後期前半～中頃の土器様相がある程度把握できる町域の遺跡は他にない。そのため、これらの資料は、今後当地域の弥生時代後期の遺跡動向や地域間交流を理解するうえで示唆に富む資料となろう。

⑪上沢遺跡（小林編2004）　豊北町神田上字上沢の低丘陵縁辺上に位置する。標高約45～47ｍである。中世前半を中心とした遺跡である。弥生土器は中世遺構面直上に堆積した包含層から、中期後半～後期前半の壺・甕などが僅かに出土している。

⑫上寺川遺跡（沖田編2005）　豊北町大字神田上字上寺川の低丘陵先端に位置する。標高約63～66ｍである。中世前半を中心とする遺跡である。弥生土器はSD01から中世の土師器・磁器類に混ざって、後期後半～終末の甕・高坏などが僅かに出土している。

【神田地区】

⑬的場遺跡（堀田編2005）　豊北町大字神田字的場の段丘上に位置する。標高約39～41ｍである。縄文時代後期と中世後半を中心とする遺跡である。弥生土器はＢ区東端トレンチ掘削時に、完形復元できる中期の小型壺が１点出土しているが、詳細については不明である。

【阿川地区】

⑭二刀遺跡（有福編2003）　豊北町大字阿川字二刀の台地裾部直下の低湿地に位置する。標高約1.5～2.5ｍである。弥生時代から中世にかけての遺物が包含層から土器類を中心に多量に出土している。包含層の性格としては、層序ごとの遺物の時期的なまとまりがみられないため、土石流等によりもたらされた２次、３次堆積の包含層と考えられている。弥生土器は前期後半～中期初頭、中期後半、後期後半、終末の壺、甕、高坏などが出土している。量的にまとまるのは前期後半～中期初頭である。特徴的なのは、やはり中期における須玖式系土器の存在と、主に周防地域に分布するといわれ中期後半に比定されている、いわゆる跳ね上げ口縁の甕であり、当該期の地域間交流を考えるうえで重要な資料である。集落主体部は背後に控える台地上に位置すると考えられ、弥生時代を通じて断続的に集落が営まれていた可能性が高い。

⑮平野遺跡（小林編2004）　豊北町大字阿川字平野の低丘陵縁辺の緩斜面に位置する。標高約９～12ｍである。古墳時代前期と中世前半を中心とする遺跡である。弥生土器は調査区南で確認された埋没谷に堆積した包含層から中期後半、終末の壺・甕などが少数出土している。主に周防地域に分布するといわれ中期後半に比定されている、いわゆる跳ね上げ口縁の甕の出土は、当該期の地域間交流を考えるうえで重要な資料である。

【粟野地区】

⑯宮迫神田遺跡（堀田編2005）　豊北町大字粟野字神田の丘陵先端にあたる台地及びその裾部に位置する。眼下には、粟野川とその支流の宮迫川を望み、その合流部に発達した自然堤防の背後に扇状

地性低地が広がる。標高約７～12.5ｍである。弥生時代～中世にかけての各種遺構、遺物が確認されている。

弥生時代に属する遺構は中期後半の竪穴住居３軒、中期２軒、終末～古墳初頭２軒の計９軒、掘立柱建物１棟、土坑は前期後半４基、前期末１基、中期初頭１基、中期後半２基、前期末～中期後半１基、中期１基の計10基、その他柱穴がある。ただし、当遺跡は現況水田であったことからも後世の土地利用による削平率が極めて高い上に、古代～中世の柱穴も多数確認されているため、各遺構の時期比定に不安定な側面が否めないことは注意する必要がある。そのため、集落構成を理解するための情報量に乏しいが、おおよその集落動向として、弥生時代においては前期後半頃から集落形成が始まり、中期後半に最盛期を迎えたようである。その後、後期には断絶がみられるものの、終末～古墳時代初頭にかけて再び集落が営まれる。このような集落の盛衰は、後述する同じ粟野川流域の遺跡である甲殿遺跡の様相と同様である。また、集落構成については断片的な情報しかないが、前期の遺構としては土坑しか確認されておらず、中期後半になると竪穴住居と土坑がみられる。ここから集落構成を読み取ることは難しいが、後述する甲殿遺跡に近い様相を想定してよいのかもしれない。

遺物密度は遺構密度に比して高い。ただし、これは台地裾際に厚く堆積した遺物包含層からの出土が多数であり、遺構に伴う遺物は非常に少ない。出土遺物は弥生時代前期後半～中期後半の土器が主体を占め、なかでも中期後半が最も多い。このような土器量比は、当然、遺跡の盛衰に比例しているものと理解してよかろう。傾向としては、前期後半～中期初頭は綾羅木式土器に代表される在地土器が多数を占め､そのなかに市域の菊川町域や豊田町域で主体的文様構成をとる山形重弧が認められる。また、突帯文土器（有馬 2005b）や断面円形の粘土帯を貼り付けた朝鮮系の後期無紋土器もごく僅かであるが出土している。

中期前半頃になると城ノ越式や須玖Ⅰ式といった北部九州系土器の出土が目につきはじめるが、胴部に櫛描文を施す壺や口縁部内面に櫛描山形文と貝殻文が施された壺がみられ、瀬戸内地域の影響も窺われるようになる。中期後半には須玖Ⅱ式系土器の出土が顕著になり、土器様相にみられる中期前半頃からの北部九州地域の影響は、この時期に一つのピークを迎える。ただし、周防部で主体的にみられる跳ね上げ口縁の甕や県内でも類例に乏しい瀬戸内系の無頸壺、あるいは脚付鉢の口縁部とされる土器の存在などは中期を通して常に瀬戸内地域と一定の交流があることは看過できず、瀬戸内地域の影響もやはり、中期前半より密になってきていることが指摘できよう。したがって、中期後半～末にかけては各地域との交流それ自体には濃淡はあっても、相対的な地域間交流は活発化しているといえよう。

このような地域間交流を象徴するのが、遠賀川以西の北部九州地域で盛行した甕棺片の出土である。この甕棺片は時期的には須玖Ⅱ式古段階、橋口達也氏の編年に照らせばＫⅢａ式の範疇で捉えられる資料とされている。この甕棺片の表面にみられる砂礫を観察した奥田尚氏はその特徴から糸島平野の砂礫と推定している（奥田 2005)。有馬啓介氏は奥田氏の砂礫観察の結果や北部九州における甕棺製作の背景なども考慮し、この甕棺の生産地は糸島平野もしくは甕棺製作の先進地である御笠川流域の福岡平野に限定されると指摘している（有馬 2005a)。この甕棺片の出土は、弥生時代中期後半～末における北部九州～山陰ルートの存在を浮き彫りにする

ものであり、日本海を介しての人やモノの移動実態に迫るうえで極めて貴重な資料といえよう。

続く後期は、中頃～後半に比定される口縁部に擬凹線文を施した山陰系の甕が出土し、古墳時代初頭前後に比定される鼓形器台の出土もみられることから、後期中頃から山陰地域の影響も受け始めることが窺える。その他の遺物としては、石剣や当該期に比定できる可能性のあるガラス製小玉などがある。宮迫神田遺跡はその地理的位置関係からも粟野川及び日本海を介して、北部九州～山陰さらには瀬戸内を繋ぐ物資流通ネットワークの結節点として、今後もより多くの情報を提供する遺跡となるであろう。

【田耕地区】

⑰甲殿遺跡（石川ほか編 1993、谷口 2000） 豊北町大字田耕字杣地の粟野川右岸の舌上台地に位置する。眼下には、町域では最も広い谷底低地が広がる。標高約 51 ～ 52 mである。竪穴住居 18 軒、掘立柱建物 20 棟、土坑 116 基、溝状遺構 4 条が出土し、その時期は弥生時代前期末～中期初頭、中期前半～後半、終末期の 3 時期に大別される。今のところ豊北町域で唯一、集落構成の把握がある程度可能な遺跡である。

前期末～中期初頭は貯蔵穴を含む 13 基の土坑が確認され、当該期の住居跡は確認されていない。当遺跡は現況水田であったことからも後世の土地利用による削平率が高いため、竪穴住居の存在を完全に否定することはできないが、響灘沿岸地域の弥生時代前期の集落でも広く認められる傾向であるため、当該期の甲殿遺跡の集落構成も同様であったと理解しておきたい。

中期前半～後半は竪穴住居 10 軒、土坑約 40 基、土坑墓 1 基、溝状遺構 4 条が確認され、なかでも中期後半が集落の最も盛行した時期である。これら遺構の配置状況は、床面積が平均 40 ㎡と比較的大型の竪穴住居が丘陵の縁辺部に 3 軒程度がまとまり、中央部に土坑が分布する状況が看取される。また、居住域南端で単独で確認された ST － 1 （土壙墓）からは、獣形及び異型の翡翠製勾玉 2 点と緑色凝灰岩製管玉 30 点からなる垂飾具が出土している。このような状況からは当該期の居住空間利用に一定の計画性があることが窺われ、当地域の弥生時代中期の集落構成を理解するうえで指標となる。また、この段階で確認された特定個人墓とされる ST － 1 は注視され、今後これをどのように理解するのかも重要な課題といえよう。

終末期は竪穴住居 6 軒、土坑 1 基、掘立柱建物 20 棟が確認された。竪穴住居は円形と方形の二者があり屋内にはベッド状遺構を有するものがみられる。特徴的なのはそれに付属する周溝で、その規模は径 10 m以上にもなる。とりわけ、土井ヶ浜南遺跡でも確認されている方形住居に円形周溝をめぐらすものが複数あることは注目される。集落内における住居の位置としては中期同様、丘陵縁辺部に占地する。また、検出された掘立柱建物はほぼ当該期の建物と推定されており、特徴として、丘陵中央部に位置し棟方向が丘陵主軸に併行するように建てられていることが指摘されている。一般的な掘立柱建物の時期比定については、遺構の性格上不安定な側面がつきまとうため慎重に扱う必要があるが、この時期推定が妥当とすれば、中期後半で確認された土坑群が掘立柱建物群という属性に変化するものの、集落構成の配置としては中期後半と相似形をなすといえよう。

遺物密度は遺構密度に比して低いが、傾向としては中期には北部九州系の鋤形口縁をなす土器や口縁部が直立し外側面に擬凹線を施す瀬戸内系の高坏がみられ、終末期には山陰系土器が認められる。

表１ 豊北町域の弥生時代遺跡消長一覧

※破線は遺物のみ、実線は遺構・遺物確認

番号	地区		遺跡名	性格	時期					主な遺構／遺物	立地	標高（m）
					突帯文	前	中	後	終末			
1	角島		沖田遺跡	包含層	- - - - -	- - - - - - - - - - -	-		- - - -	土器・石器	丘陵	4.5～9
2	神玉	江尻下	土井ヶ浜遺跡	埋葬地・祭祀場？		———	———		———	石棺墓・土坑墓／土器・石器・貝製品・鏡	砂丘	3～5
3			宮ノ下遺跡	包含層		- - -			———	竪穴住居・土坑・柱穴／土器・石器	丘陵	6～9
4			土井ヶ浜南遺跡	集落	- - - - - -	- - - - - ———			———	竪穴住居・土坑・柱穴／土器・石器	丘陵	4～14
5		下田	竜王遺跡	包含層		- - -	- - - - - - - - - - -	- - - - -	- - - - - -	土器・石器	丘陵	25～27
6			南ヶ畑遺跡	集落				———	———	竪穴住居・柱穴／土器・石器	丘陵	43.5～50
7			岡ノ台遺跡	包含層				- - -	- - - - - -	土器・石器	丘陵	36～39
8		根崎	今宮遺跡	包含層		- - -				土器・石器	丘陵	25～31
9			中平尾遺跡	集落					———	竪穴住居／土器・石器	台地	47～53
10		西沢	西沢遺跡	集落		———	———	——— - - -	- - - - - -	土坑・土器溜り／土器・石器	丘陵	28～29.5
11			上沢遺跡	包含層			- - - - - -	- - -		土器・石器	丘陵	45～47
12		寺川	上寺川遺跡	包含層				- - -	- - - - - -	土器	山地	63～66
13	神田		的場遺跡	包含層			(- - - - - -)			土器	段丘	39～41
14	阿川		二刀遺跡	包含層		- - - - - -	- - - - - -	- - - - - - - - - - -	- - - - -	土器・石器	低湿地	1.5～2.5
15			平野遺跡	包含層			- - - - -		- - - - -	土器・石器	丘陵	9～12
16	粟野		宮迫神田遺跡	集落	- - - - - -	———	———	- - - - -		竪穴住居・掘立柱建物・土坑／土器・石器	台地	7～12.5
17	田耕		甲殿遺跡	集落		———	———		———	竪穴住居・掘立柱建物・土坑／土器・石器・ガラス製トンボ玉	台地	51～52
18			上太田遺跡	集落					———	竪穴住居／土器・石器	段丘	45～48

このような出土土器にみられる外来系土器の様相は宮迫神田遺跡と同様である。その他の遺物としては太型蛤刃石斧、石包丁、環状石斧未製品、砥石などがみられるが、なかでもガラス製トンボ玉の出土は特筆される。このガラスの成分分析の結果、中国戦国時代の同心円文環状ガラス断片とみなされている（由水 1993）。

田耕地区の中心的集落とみられる甲殿遺跡は、各時期の集落形態の特徴をよく示していることからも、豊北地域における弥生時代の集落構成を時系列的に理解するうえで欠くことのできない極めて重要な遺跡である。そして、遺跡の盛衰や集落構成において軸を同じくする宮迫神田遺跡との相互関係、しいては粟野川を介しての周辺地域との交流について理解を深めることが、豊北町域の弥生社会を理解するうえで欠かせない作業となろう。

⑱上太田遺跡（内山編 2003） 豊北町大字田耕字上太田の太田川右岸の河岸段丘上に位置する。標高約 45 ～ 48 mである。中世後半を中心とする遺跡であるが、弥生時代終末の竪穴住居１軒とそれに伴う土器などが僅かに出土している。

以上、豊北町域の 18 遺跡についてその概略を述べた。遺跡の時期的な盛衰をまとめたものが表１、

各遺跡の分布状況は図１に示すとおりである。

４．予　察

それでは以下に、これまで触れてきた各遺跡の様相から読み取ることができる豊北町域の弥生時代遺跡の動向について、筆者なりにまとめてみたい。

１）遺跡の変遷と画期

まず、先に示した遺跡概要と表１をもとに、豊北町域における弥生時代遺跡の変遷と画期について簡単にまとめておきたい。

突帯文期の遺跡は沖田遺跡、土井ヶ浜南遺跡、宮迫神田遺跡などで確認できる。なかでも沖田遺跡では付近に住居の存在を窺わせるほど、まとまった量の土器が確認されている。豊北町域では今のところこの３遺跡のみであるが、立地的には臨海部に位置する特徴がある。また、資料不足は否めないものの、遺跡の時期的変遷についてもこれら突帯文期の遺物を出土する遺跡は、少なくとも前期末ないし中期初頭まで継続する傾向が窺える。また遺跡数も、前期中頃から徐々に遺跡数の増加がみられ前期末に一つのピークを迎える。しかし、中期に継続する遺跡は極めて少なく、特に響灘臨海部に位置する集落遺跡は皆無となる。それはあたかも、当地域の弥生社会の停滞を意味するかのような様である。しかしながら、二刀遺跡、宮迫神田遺跡、甲殿遺跡などのように中期を通して継続する遺跡は遺構や遺物の密度が比較的高く、小地域における中心的な集落となっていくようで、中期後半になるといずれも最盛期を迎えている。したがって、集落規模が拡大傾向にあることや出土する外来系土器の様相からみても、人とモノの交流が盛んにおこなわれていた様子が窺われ、必ずしも集落遺跡数の少なさが当地域の弥生時代中期社会の停滞を意味するものではないことは認識しておく必要があろう。

ところが、中期後半に一定の確立をみた弥生社会が、後期前半～中頃にかけて再び減退期を迎えるようで、その様は中期前半～中頃にかけての現象と重なる。そして、後期後半～終末期になって集落数は増加傾向となる。とりわけ終末期の遺跡増加が顕著で、響灘臨海部にも再び弥生時代前期以来途絶えていた集落が形成され、古墳時代を迎えることとなる。

２）小地域と集落構成

さて、これまでみてきた遺跡の分布状況と遺跡の消長および河川、低地、海浜といった地理的条件を加味すると、弥生時代の豊北町域では図３に示すような、少なくともａ～ｅの５群の地域的まとまりを想定することができそうである。[15] 今回はあえて各遺跡の時期的な消長を考慮せずに同一平面上に示しているため、各時期のなかで多少の揺れはあろうが、概ね弥生時代を通じてこのような単位で小地域を形成していたと考えることは可能であろう。ここでは、このような小地域単位を前提として当地域の集落構成を通観してみることとしたい。

まず弥生時代前期についてである。江尻下地区の遺跡状況や地理的環境、土井ヶ浜南遺跡における前期集落の様相、あるいは、山田康弘氏が金関氏の推定人口（金関 1980）とそれ以降の調査成果をもとに一集落 25 人前後とした推定人口（山田 1997）などをふまえると、当該期は丘陵単位で展開する複数の小規模な散居形態の集落の有機的結合によって小地域集団を形成し、他の小地域集団との交

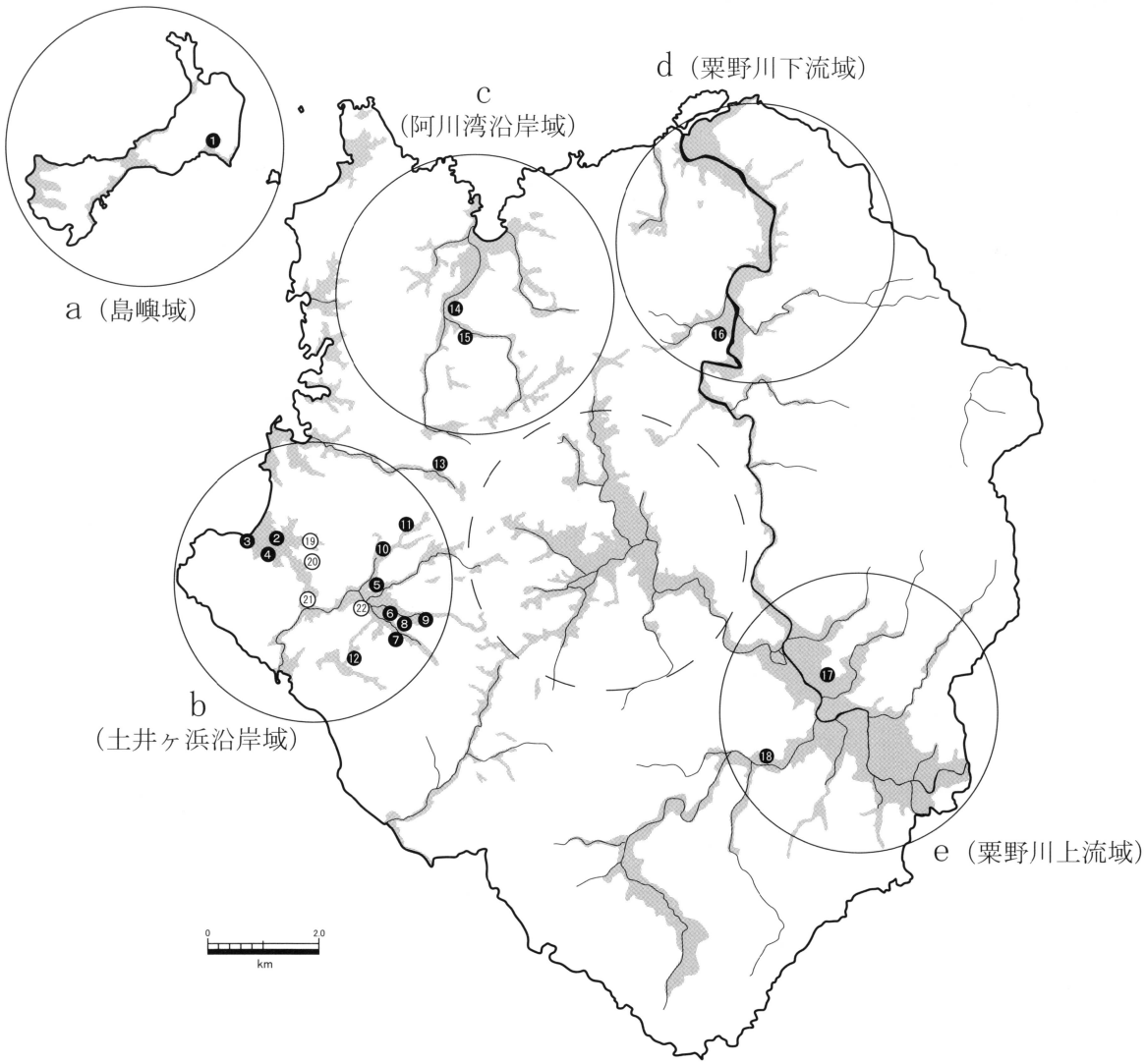

図３ 豊北町域における小地域想定図

渉をおこなっていたと推察される。そのため、同様に下関市域の響灘臨海部に位置する綾羅木郷遺跡や吉永遺跡でみられるような中心的集落が存在する可能性は低いとみられる。中期、特に後半～末にかけては、前期にみられるような小さな丘陵単位に散在して営まれる散居形態の集落から、甲殿遺跡にみられるような一定の丘陵に集約することで規模を大きくした集住形態の集落が現れてくることが予測される。そして後期になると、散居型集落と集住型集落といった集落構成の分化がより明確化されていくようになるのではなかろうか。すなわち、南ヶ畑遺跡、中平尾遺跡、下太田遺跡、平野遺跡で確認されるような１～２軒程度で、長期の定住の見込めない最小単位に近い住居形態をとる散居型集落と、宮迫神田遺跡、甲殿遺跡、土井ヶ浜南遺跡などのある程度のまとまりをもった住居で構成される集住型集落というようにである。そして、集住型集落はその位置関係から図３で示した小地域的なまとまりのなかに１～２遺跡程度存在し、散居型集落は上寺川遺跡や下太田遺跡のように谷間の山間部にも進出していくことを予測させる。

このような集落構成に、これまで触れてきた遺跡立地や地理的環境を加味した場合、豊北町域の弥生人たちは先に示した小地域を基本的な日常生活圏としながら、そのなかで適度な集住と散居を繰り返す移動性に富んだ人々であったと考えられる。これを象徴的に表せば、従来の指摘どおり生業の中

心を海や山に求めた半農半漁民であったといえ、そのことが当地域の弥生時代の集落数や規模などにも少なからず影響を与えているのではないだろうか。

３）居住域と墓域

先学によりこれまでにも再三指摘され、響灘沿岸地域の遺跡動向のなかでも最も重要な現象として位置付けられてきた問題として、中期初頭を画期とする遺跡の消滅がある。豊北町域でこの現象が最も顕著に表れるのはｂ群域の遺跡である。そこで最後に、ｂ群域の遺跡における居住域と墓域の変遷について若干の整理をおこない、将来の検討に向けての備えとしたい。

まず墓域としての土井ヶ浜遺跡についてである。土井ヶ浜遺跡はこれまでの19次に渡る発掘調査によって、その埋葬時期は弥生時代前期中頃から中期末とされ、最盛期は前期末及び中期中頃～末と考えられている[16]。これに対して、前期まで土井ヶ浜遺跡と至近距離に居住域を形成していた江尻下地区周辺の遺跡はすべて、足並みを揃えるように中期初頭までには消滅し、以降江尻下地区周辺では、終末期前後を迎えるまで活動の痕跡すら見いだせない状況となる。この現象の要因については、争乱や疫病によってこの地区の弥生人たちが滅したとすることも可能かもしれない。しかし、これを追認する物証を考古学的にも人類学的にも認められない現状では、このような要因を想定することは困難である。したがって、土井ヶ浜遺跡での造墓活動が継続するにもかかわらず周辺に居住域がみられないということは、居住域が別の場所に移動したと考えるほうが自然であろう[17]。

ではその場合、一体どこに移動したのかということが問題となるが、現状の遺跡分布に照らせば、ｂ群域で中期の遺跡が確認できるのは竜王遺跡を中心とした下田地区である。そのため、下田地区が移動先としての有力地となろう。この地区は日当たり良好で適度な居住空間を確保できる低丘陵や台地が地区中央付近に向かって派生し、その眼下には、小野川、根崎川などの支流と本流である矢玉川の合流作用によって、狭小ながらも肥沃な扇状地性低地が広がっている。町域の沿岸部にはまれな、小さな盆地状地形をなす地区である。このような地理的環境にあるため現在の豊北町域のなかでも安定した水田耕作面積を有す。また、現在も土井ヶ浜と甲殿遺跡のある田耕神社間でおこなわれている７年に１度の祭礼行事「浜出祭」のルートであることからも、古来から物資流通の径路上に位置する場所であったことは容易に理解できる。その意味ではまさに居住適地であり、沿岸部の江尻下地区[18]から若干内陸に入った下田地区[19]への居住域の移動を想定することはあながち無理なことではなかろう。そしてこのような遺跡動向に照らしたとき、土井ヶ浜遺跡はｂ群域の集団によって形成された墓域であるという可能性が生じるのである。また、居住域が移動するにもかかわらず墓域は固定され続けるという現象は、同時に、墓域としての土井ヶ浜古砂丘への強い固執を再認識させるものである。残念ながら、今の筆者には到底その本質について述べる力はなく、またその解明には多方面からの検討が必要であるが、いずれにせよ、その背景については意識的に常に探求していくべき問題である。そのため、ｂ群域における遺跡動向の解明は、土井ヶ浜遺跡研究の本質ともいえる弥生人の社会構造や観念形態を明らかにするうえで極めて重要な課題といえよう。

５．おわりに

以上、豊北町域の弥生時代遺跡を概観し、地域的特性やそこから読み取れるいくつかの問題につい

て若干の私見を述べた。簡潔にまとめると、①豊北町域の弥生時代遺跡は、中期初頭と後期初頭に遺跡数が激減し遺跡動向の大画期となっており、この現象は響灘臨海部に位置する遺跡に顕著である。②遺跡の分布状況や立地環境から、弥生時代を通して概ね５つの小地域単位を想定できる。③集落構成は、前期：散居型集落→中期：集住型集落の出現→後期：散居型と集住型集落の分化の進行といった集落構成の変遷が予測される。④土井ヶ浜遺跡の所在する江尻下地区における中期初頭の集落の消滅を居住域の移動現象と捉え、その移動先として下田地区を想定した。⑤その結果として、土井ヶ浜遺跡の造墓集団を絞り込み、土井ヶ浜遺跡はｂ群域の集団により形成された可能性が生じることなどを指摘した。

とはいえ、実証的な検証に乏しい表層的な解釈論に終始したため、十分に論意を尽くせず、触れることができなかった問題も多い。特に、各遺跡概要のなかで個別に触れ、その重要性を認識しながらも、当地域における広域な視点での地域間交渉の特性について通観することができなかった。無論、これが最終的な結論ではないが、筆者の浅学を露呈する甚だ心もとない記述となってしまった。そのため、事実誤認や遺漏があることも危惧されるが、これについては先学諸氏からのご叱責を請うばかりである。ただ、今回の作業を通じて当地域の弥生社会に迫るうえで解決すべき多くの課題が山積していることを、筆者なりに認識できたことは有益であった。今後はここで学んだことを基礎とし、まずは考古学の本義である各種遺構、遺物の検討に立ち返った地道な作業を積み重ねることで、一歩ずつ当地域の弥生時代社会に迫っていきたい。

（2006年２月16日稿了）

【註】

１）現在の下関市は平成17年２月13日をもって、下関市と豊浦郡（豊浦町・菊川町・豊田町・豊北町）の一市四町が合併した新たな下関市である。したがって蛇足になるが、今回検討する下関市豊北町域の弥生時代遺跡とは旧・豊北町に所在する遺跡である。

２）この地域は、北浦（地域）という呼称でも一般的に知られ、考古学的にも北浦という地域名称を用いて考察されることも多い。今回使用する響灘沿岸という用語も北浦と同義と理解されたい。

３）ただし、最終的に小野氏はこの海進現象と高地性集落の消長には何らかの影響はあった可能性はあるとしながらも、その主因とはならなかったと結論づけられている（小野 1975）。

４）「いわゆる「弥生小海進」は実在し、そのピークは畿内編年によると、弥生時代の中期の末葉すなわち二世紀後半の「倭国大乱」のころで、その後まもなく海退に転じ、弥生時代の末から古墳時代には旧に復していたことから、この小海進は短期間であったらしい」（小野 1975a）としている。

５）もちろん、土井ヶ浜遺跡をはじめとするこれ以降の響灘沿岸地域の考古学的成果に照らせば、積算された数字について多少の修正は必要であろう。しかし、重要なことは積算された数字の当否ではなく、その基礎となる仮定条件の構築作業が現在でも非常に示唆に富む方法論であり、決して色あせるものではないことを強調しておきたい。

６）ただし、現在報告書作成中で弥生時代の遺構・遺物が確認された遺跡については、図１の遺跡分布図上にその位置を明示した。具体的には、平成16年度と17年度に発掘調査がおこなわれた⑲片瀬遺跡、⑳森広遺跡、㉑波原遺跡、㉒古殿遺跡である。

７）先述のとおり、土井ヶ浜遺跡は、学史的にも土井ヶ浜Ⅳ式として知られる完存率の非常に高い土器群や小形仿製鏡、あるいは炉跡状遺構の出土といったこれまでの調査成果から、弥生時代終末頃には何らかの祭祀に関係する場として使用されていたと考えられている。

８）宮ノ下遺跡では少なくとも15軒の方形竪穴住居が出土したが、調査担当者は遺構の見極めが難しい遺跡状況で

あったためか、そのほとんどを床面検出の段階で住居と認識されたようである。そのため、それに伴っていたであろう遺物の帰属が明らかでなく、SD003 出土遺物や住居跡群周辺出土遺物から当該期、ないしは古墳時代後期とするしかない。

9）ここでいう土井ヶ浜南遺跡とは、平成 15 年度に寺ヶ浴遺跡、広田遺跡という遺跡名称で調査された調査区を含む。これら２遺跡は、以前から調査されてきた土井ヶ浜南遺跡と同一の丘陵に位置する遺跡であり、遺構・遺物の分布状況をみても、別遺跡として分かつことが困難なことは明らかで、遺跡実態を把握するうえで支障をきたす危険が大きかった。そのため下関市教育委員会では、山口県教育委員会による遺跡地図情報改訂（平成 18 年３月付け）を契機に、これまでの学史的背景もふまえたうえで、土井ヶ浜南遺跡として名称の統一が図られた。

10）１次調査で確認された SK ４は床面径 170 ㎝前後で断面袋状を呈すことから、これまでの調査で唯一貯蔵用竪穴とされているものである。しかし、残念なことに検出面からの深さが 20 ㎝前後であるため、著しい削平を受けたとしている。

11）その原因について、前期遺構が主体的に分布する丘陵先端部を調査した一次調査では、先の貯蔵用竪穴の残存状況の悪さから住居跡は後世の削平により消滅したものと考えられている（鈴木編 1992）。その後の調査でも明らかなように、当該期の遺構が主体的に分布する丘陵先端付近は後世の削平が特に著しい場所であるため、遺構の性格上、掘削深度の高い土坑類が主体的に残った可能性は十分に考えられる。さらに、豊北町域における当該期の遺跡のなかでは、最も広範囲に発掘調査がおこなわれている遺跡であるにもかかわらず、未だ住居跡が確認されていないことはそのことをより思考させる。しかし一方で、集落内での各種施設の構築に際して用途や地形に応じた選定がおこなわれた結果とみることも可能であり、そうした場合、未調査地である丘陵頂部付近に住居跡が存在する可能性も同じように否定できるものではない。したがって、削平を主因とすることで他の可能性を模索する道を閉ざすことはやはり避けるべきであろう。

12）資料的な制約もあって現時点では各遺構の詳細な時期をおさえることは難しい。そのため、ここでは終末期前後という一定の幅をもたせて遺構の分布状況を俯瞰している。したがって、正確な遺構の分布状況を見切れていないことは問題であるが、その詳細については課題とし、いずれ再検討したい。

13）ただし、報告書を一見すれば、これらの遺構から出土した遺物に時期差があることは明白である。SI0001 はその住居形態から当該期の遺構に位置付けることは可能と考えるが、SI0003 の時期比定については古墳時代中期の土師器や須恵器も一定量出土している。そのため遺構の時期については、終末期の住居と断定するものではないことは明記しておきたい。報告書では参考となる遺物の出土状況がほとんど触れられていないため、遺構の時期をどの遺物の時期に対応させるべきか難しく、その判断には詳細な検討を経る必要がある。

14）このような形態の住居の重要性については、前原市教育委員会の江野道和氏のご教示によっている。江野氏は、当該期にみられるこのような形態をなす住居の意義を見出すため現在も広域的な追跡をおこなっておられる。その過程のなかで、筆者は寺ヶ浴遺跡で確認された SI0001 についての情報提供を求められ、その重要性を認識するに至ったものである。ここに改めて、江野氏に感謝の意を表したい。

15）破線で示した滝部地域には、現在、確実な弥生時代遺跡は確認されていないが、その位置関係からも明らかなようにｂ～ｅの各群域に繋がる町域における内陸の十字路に位置する。将来、この地域で弥生時代遺跡が確認され、ひとつの小地域を設定できる可能性は高い。

16）土井ヶ浜遺跡の造墓時期については、調査所見から、少なくとも前期中頃～後半、前期末、中期中頃～後半（末）の３時期にわたるとする見解（乗安 1982・1983・1984）と、前期～中期にかけて連続的に営まれたとする見解（山田 1997・1999）があり、その造墓時期をめぐって微妙な認識の違いがある。造墓時期は土井ヶ浜集団の構造を考えるうえで最も基礎となる問題である。このことは今回の論旨に特に影響を与えるものではないが、今後、再検討すべき重要な問題の一つといえよう。

17）地域や現象の規模は全く異なるが、南関東地方の宮ノ台式期における弥生時代集落の時空間的動態について分析をおこなった安藤広道氏は、鶴見川・早渕川流域に展開していた集落群が後期初頭に突如として廃絶される現象について、この時期に人々が突然死滅したことを示す証拠が見られない限り、集団の移動がほぼ確実な例となることを指摘している（安藤 2001）。

18）今回はひとまず江尻下地区と表現したが、平成 17 年度に発掘調査された岡林地区の片瀬遺跡（⑲）、波原地区の

森広遺跡（⑳）、波原遺跡（㉑）においても前期の土器は確認されているが、中期の土器は確認できていない状況である。そしてこれらの遺跡は、土井ヶ浜海岸を窓口として地理的にも完結した空間領域を有する地区に所在する遺跡である。そのため現状では、江尻下・岡林・波原地区に所在する弥生時代前期遺跡は、遅くとも中期初頭をもって足並みを揃えるように廃絶している蓋然性は高いといえよう。

19）ここでいう「下田地区」とは、下田・根崎・上野といった自治区分を中心とした地域を指すものであり、これらの地区は、長門一ノ宮の別宮として鎮座する住吉神社（神田別府八幡宮）の前面に広がる低地帯を中心として、地理的にも完結した空間領域を形成していることを付しておきたい。

【引用・参考文献】

ー論　考ー

有馬啓介　2005a「下関市宮迫神田遺跡の大型甕型土器」『山口考古』第25号　山口考古学会

有馬啓介　2005b「宮迫神田遺跡の突帯文土器」『陶塤』第18号　財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター

安藤広道　2001「集落の移動からみた南関東の弥生社会」『弥生時代の集落』金関　恕・大阪府立弥生文化博物館　学生社

安藤広道　2003「弥生時代集落群の地域単位とその構造」『考古学研究』第50巻第1号（通巻197号）　考古学研究会

石井龍彦　2000「山口県西部の弥生時代後期後半～古墳時代初頭の土器について」『陶塤』第13号　財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター

井関弘太郎　1968「先史時代・歴史時代の地殻変動」『第四紀研究』第7巻　日本第四紀学会　※筆者未見

井関弘太郎　1974「日本における2000年B.P.ころの海水準」『名古屋大学文学部研究論集LXⅡ』名古屋大学文学部　※筆者未見

太田雅史　2005「下関市の遺跡分布について」『研究紀要』第9号　下関市立考古博物館

奥田　尚　2005「宮迫神田遺跡の土器の表面にみられる砂礫」『宮迫神田遺跡　的場遺跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告第51集　下関市文化財調査報告書11　山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第40集　財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター　下関市教育委員会

小野忠熙　1975a「弥生時代の砂浜海岸と人文生態」『日本考古地理学研究』1986所収　大明堂

小野忠熙　1975b「響灘沿岸の砂質海岸の形成」『日本考古地理学研究』1986所収　大明堂

金関　恕　1980「北浦における弥生前期の社会」『日本民族文化とその周辺　考古篇』国分直一博士古希記念論集編纂委員会

国分直一　1970「山陰響灘沿岸の弥生文化ー生産と社会の問題をめぐってー」『日本民族文化の研究』考古民俗叢書〈7〉慶友社

田畑直彦　2001「湯免式壺についてー角島・沖田遺跡出土の新資料ー」『山口考古』第21号　山口考古学会

田畑直彦　2003a「山陰地方における綾羅木系土器の展開」『山口大学考古論集』近藤喬一先生退官記念事業会

田畑直彦　2003b「長門北浦地域における弥生文化の成立」『立命館大学考古学論集Ⅲ』立命館大学考古学論集刊行会

谷口哲一　2000「甲殿遺跡」『山口県史　資料編　考古1』山口県

中野尊正　1956『日本の平野』古今書院　※筆者未見

中村友博　2003「沖田遺跡」『山口県史　資料編　考古2』山口県

乗安和二三　2000「土井ヶ浜遺跡」『山口県史　資料編　考古1』山口県

乗安和二三　2002「土井ヶ浜遺跡」『細形銅剣文化の諸問題』九州考古学会・嶺南考古学会第5回合同考古学大会資料九州考古学会・嶺南考古学会

森岡秀人　2000「弥生集落研究の新動向（Ⅲ）ー小特集「淀川流域における集落の様相」によせて」『みずほ』第32号　大和弥生文化の会

山田康弘　1997「土井ヶ浜集団の社会構造」『先史学・考古学論究Ⅱ』熊本大学文学部考古学研究室創設25周年記念論文集龍田考古学会

山田康弘　2000「山陰地方における列状配置墓域の展開」『島根考古学会誌』第17号　島根考古学会

由水恒雄　1993「Ⅳ　山口県豊北町甲殿遺跡出土の同心円文ガラス断片について」『甲殿遺跡』山口県埋蔵文化財調査

報告代 161 集　財団法人山口県教育財団・山口県教育委員会

－報告書等－

有福史博編　2003『二刀遺跡　丸山遺跡　神田口遺跡』山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第 24 集　土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

有福史博編　2005『寺ヶ浴遺跡　広田遺跡　磯城遺跡』下関市文化財調査報告書９　山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第 38 集　下関市教育委員会　土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

石川　満・谷口哲一・藤上仁志編『甲殿遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告代 161 集　財団法人山口県教育財団・山口県教育委員会

内山雅史編　2003『下太田遺跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告第 39 集　山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第 22 集　財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター　豊北町教育委員会

沖田健太郎編　2005『上寺川遺跡』安芸高田市地域振興事業団調査報告書第 13 集　下関市文化財調査報告書５　山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第 34 集　財団法人安芸高田市地域振興事業団　下関市教育委員会　土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアム

小林善也編　2004『平野遺跡　竜王Ⅰ・Ⅱ遺跡　上沢遺跡』山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第 34 集　土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

小林善也編　2005『宮ノ下遺跡　神田遺跡』下関市文化財調査報告書８　山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第 37 集　下関市教育委員会　土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

小南裕一・上田俊広・椿　英一編　2004『上太田遺跡　市の瀬遺跡　南ヶ畑遺跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告第 45 集　山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第 31 集　財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター　豊北町教育委員会

田部秀男編　2003『中平尾遺跡・上今宮遺跡』山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第 23 集　土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

中国四国農政局　2005『国営豊北土地改良事業変更計画概要書（区画整理－農地再編整備）』

近藤晋一郎編　2004『岡ノ台遺跡』山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第 26 集　土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

鈴木　卓編　1992『土井ヶ浜南遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第 147 集　山口県教育委員会

鈴木　卓編　1993『土井ヶ浜南遺跡Ⅱ　松成遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第 147 集　山口県教育委員会

古庄浩明編　2000『角島・沖田遺跡』山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第 18 集　土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

古庄浩明編　2000『土井ヶ浜南遺跡Ⅲ』山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第 19 集　土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

豊北町　1972『豊北町史』

豊北町　1994『豊北町史　二』

堀田浩一編　2005『宮迫神田遺跡　的場遺跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告第 51 集　下関市文化財調査報告書 11　山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第 40 集　財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター　下関市教育委員会

毛利恒彦・松崎卓郎編　2004『西沢遺跡』山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第 27 集　土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

豊北町教育委員会編　1979『史跡土井ヶ浜遺跡保存管理計画策定報告書』

乗安和二三　1982『土井ヶ浜遺跡第７次発掘調査概報』豊北町埋蔵文化財調査報告第２集　豊北町教育委員会

乗安和二三　1983『土井ヶ浜遺跡第８次発掘調査概報』豊北町埋蔵文化財調査報告第５集　豊北町教育委員会

乗安和二三　1984『土井ヶ浜遺跡第９次発掘調査概報』豊北町埋蔵文化財調査報告第６集　豊北町教育委員会

山田康弘編　1999『土井ヶ浜遺跡第 17 次発掘調査報告』山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第 16 集　土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

研究紀要

第１号

発行年月日　2006年３月
編集・発行　土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
〒759-6121　山口県下関市豊北町神田上891-8
TEL　0837-88-1841・1842
FAX　0837-88-1843
印　　刷　アリフク印刷株式会社
〒759-5101　山口県下関市豊北町粟野4896-8
TEL　0837-85-0311
FAX　0837-85-0312